

十一（とおい記憶）

とても軽い体重で生まれてきたそうだ。

三人の姉に比べて、言葉も遅い方だったらしい。

いつ喋れるようになるのか、両親はハラハラしたという。

三歳で初めて「えび」と言葉を発し、家族を爆笑させたと聞いた。

父も母も三人の姉も、ひよこのように自分を可愛い可愛いと構ってくれた。たっぷりの愛情で自由奔放に育ててもらった自覚がある。

三輪車で遊んでくれた。U S J に連れていってくれた。

初めてひらがなで「あすかいつばさ」と名前を書けたとき、家族全員が喜んでくれた。

自分を取り巻く世界は、親鶏たちの羽で厚く護られていると思った。

でも、それが災いしたのか、保育園に通う頃には、ひどく外界に対して引つ込み思案——臆病な子に育ってしまった。

親姉妹から引き剥がさうものなら泣いて喚いて、それでも引き剥がしたら教室の隅に丸まって陣取り、動かなくなった。

小学校に上がっても社会に対する引つ込み思案は治らず、休み時間はいつも一人で寂しく過ごし、帰宅したら姉たちに甘えて過ごした。

二年生だか三年生だかのとき、家庭訪問で来た教師は、クラスのみんなはいい子たちばかりだから、飛鳥井さんからも一歩踏み出そうよ、とか、他の子たちみたいに友達を作れば大丈夫、とか、要領を得ない言葉を連呼した。一歩踏み出す方法が、まるで月面に一歩踏み出す方法を気軽に説かれているかのようで、真剣にわからなかった。

五年生の学級会においても、皆さん飛鳥井さんと仲良くしてあげて下さいと、教師がクラスメイトの前で演説をぶって、なんの効果もない辱め^{はづかし}だけ受けた形になって卒業した。

中学校入学を控えた春休みに、思春期や学校での悩みに関する特集が組まれたローティーン向け雑誌を買って読んだ。

雑誌の言うことには、本来女の子は、他人の表情を読み取る能力に長けているという。人が建前であれ本音であれ、表情を作る瞬間の、わずかな変化を読み取れるんだって！と書いてあった。

新学期が始まってからは、クラスメイトと親しくなるために、必死に表情を読もうとした。どんな微細な表情筋でも読めるように、ネットで勉強しながら努力した。持つて生まれた感度の高さもあつてか、その能力は日に日に鋭敏化していったが、肝心の表情を読んでからどう行動するかの部分がわからないため、結局は『他人の顔色うかがい』にしかならなかった。

中学生になると、努力してせっかく出来た友達が、自分よりずっと明るくて可愛くて楽しい——あるいは不良っぽい他のクラスメイトの元へ去っていくのを何回か経験した。その輪の中には怖くてとも入れなかった。離れていく友達の一人が、それでもべたべた付いてくる自分を疎んじて、悪いけどもう来ないでくんない？と言いつち、教室の時計をちらちら見ながら、あのさあ——と、面倒くさそうに、どこかで吹きこまれたかのよような講釈をぶった。

——人生ってさ、目的の駅に着くために誰と交流するか、ようするにどんなメリットのある電車に乗るかが重要なわけ。

——目的の駅は、『いつかやりたいあたし』っていう駅ね。

——あたしにとつては友達と付き合うつて、電車を乗り継いでいくみたいなもんなんだよ。

——あんたつていう電車から乗り換えて次の電車に乗ったんだから、あんたの役目は終わったわけ。

——だから、これからはあたしのこと、遠くから見守つてね。

新しい魅力的な友達と話す笑顔と違い、翼彩に話すときのその目は、もう冷たい光となつていた。

唇が震えて、その日は夜まで、いや夜明けまで言葉が出なかつた。

去つた友達を思うに、自分なんかより有益で面白くて頭が良い友達と話していたい、そう考えるのは当然だ——と、毎日毎晩、ごつごつした岩のような辛さを飲みこんでは吐き、飲みこんでは吐いた。

二年生を迎える春休みのある時、友達の出来ない自分を見るに見かねて、丁度児童教育系のNPOに在籍したばかりの姉の一人が、アイスブレイクという覚えてたの技術を教えてくれた。

アイスブレイクとはその字のごとく、人と人との緊張を氷のように溶かす心理スキルで、一対一の状況だけでなく、一対大勢、そして自分自身の緊張をほぐすときにも大いに役に立つた。

具体的な内容といえば、自己紹介のときに『実は——』と秘密を開陳するとか、一人じゃんけんをするとかの小技から始まり、人との共通点を探して三つ挙げる共通点探し、果ては大人数を相手にしたレクリエーション的なまで様々で、すぐに覚えて、大勢の人と仲良くなることができた。

ひとつひとつはゲームみたいだけど、そこにはコミュニケーションのあらゆる基本が詰まっているんだな、ということが理解できた。

翼彩が本来持っていたはずの明るさを、どこでも発揮できるようになった。

コミュニケーションしたのに上手くいかない、クラスメイトにそんな子がいることに気づいたときは、人と人を繋げてあげることで、その子の心を楽にすることもできた。すごく嬉しかった。

世界が少しだけ明るく見えたから、調子に乗って新体操なども始めてみた。

身体も心も軽く感じるようになった。

まるで翼が生えたみたいだった。

飛鳥井翼彩あすかい つばさというひよこは——いまやつと孵化したんだと思えた。

初めて経を読んだのは、中学三年生の頃だった。

アイスブレイクを教えてくれた姉が、東京でヒュージ災害に遭って亡くなり、無言の帰宅をした。

暴れまわるラージ級ヒュージから、親とはぐれた幼児をかばい、光弾に焼かれたという。偶然ながら、祖母も自分が三歳のときに、京の街で親とはぐれた三歳の子供をかばって逝去していたらしい。

自分を変えてくれた姉に何も恩返しできなかったのが悔しくて、申し訳なくて、せめてもの償いに、通夜の日に仏壇にあったポケット般若心経を開き、ふりがなを辿々しくも一生懸命読んだ。

親類縁者一同が涙して、翼彩ちゃんありがとう、きつとお姉ちゃんも成仏できるね、と言ってくれた。

亡くなった姉を想って経を読んだのだが、生きている遺族が喜んでくれた。涙してくれた。

姉を救うことは叶わなかったけれども、生きている人たちの心を一瞬でも楽にできた。すごく嬉しかった。自分の生きる道はこれだ——と思った。

それから、仏教の世界を少しだけ勉強した。

自分は、人の心と命を救えるかもしれない。

ひよこだけど、法を護る霊鳥・迦楼羅かるらになれるかもしれない。

迦楼羅の翼——持てるかもしれない。ひろげられるかもしれない。

自分の一切合切を、戦う尼僧としての道にかければ、護るべき人の目の前に立ちほだかった一体くらは倒せるかもしれない。そしてまた、目の前に立ちほだかったらその一体を倒す——それを続けていけば、やがてヒュージのいない世になるかもしれない。

私は——リリイになる。

そう決めて、仏教系ガーデンである鹿野苑ろくやおん高等女学園に入った。

学科試験は散々だったが、自分から検出された法力——マジの数値が高かったため、補欠合格でなんとか滑り込んだ。

自分の守り本尊を決める結縁灌頂けちえんかんじょうの儀式では、強く願った迦楼羅が割り当てられた。もちろん空を飛べるようになるわけでも、火を吐けるようになるわけでもないのだが、なんだか嬉しかった。しかし——。

女子高生兼尼僧見習い兼リリイというものに、これほどまでに厳しい修行が課せられているとは、想像もつかなかった。

朝四時に起床。朝の行を行ったあとに勤行しんぎやうからの戦闘訓練。ガーデンの清掃を行い、朝食は八時半。食後は行のあとに一般教科の授業を高密度で受け、昼食は十二時半。腹ごしらえをしたら、三日に一度は御山の中の

奥の院と呼ばれる場所の参拝。それが無い日は戦闘訓練。十六時にまた行をして、十七時には夕勤行。一時間
弱の休みがあり、夕食は十九時。施餓鬼法要や入浴を済ませて、さらにほんの少しの自由時間を勝ち取って、
二十一時には消灯。実戦や供養、炊き出し、合同葬儀に校内行事と、イレギュラーな日も多数ある。

入学から半年間は、特にハードな加行期間で、食事は精進料理のみとなり、当然大好きな海老は出ない。

最初は目尻を真つ赤に泣きはらしたものが、湯葉を使えば色々な食材を模した惣菜を楽しめること、そして
出汁は昆布や椎茸などを使えば、肉や魚に負けない旨味が出ることを知って好きになった。

廊下は私語厳禁で、一年生の間は合掌をしながら歩かなくてはならない。

このサイクルを身体が覚えるまでは、当然のように過労で倒れたし、身体のリズムを失調したりもしたが、
自分が成すと決めた目標を忘れないことでポジティブになり、慣れていくことができた。

テレビやインターネットは食堂院か阿闍梨の部屋でしか見ることができないし、携帯電話は入学時に八部衆
のリーダーに預けることになっている。私物やその他必要なものは、たまに御山を降りたときにお小遣いで買
わせてもらえるため、俗世との関わりが制限された生活も、それはそれで楽しい。

とはいえ、ここところちよつと楽しく暮らして過ぎていた感がある。

三年生だった先輩がガーデンを卒業して、新入生である一条蒼泉とルームメイトになったからだ。

お辞儀した彼女を見た時は、天女さまのドールだと思った。

胸までかかった繊細な質感の髪に。ホイップクリームのように白くふんわりした頬に。

憂いを帯びたような瞳に。蜜柑のひとふさのような柔らかい唇に。

本当に俗世のひとなんだろうか——と見とれてしまった。

その日のうちに沙汰があり、二人は『阿吽の陣』というパートナーを組むことになった。

最初のうちは口数も少なく、無表情でつつけんどんで、何を考えているのかわからない部分があったのだが、その顔を一所懸命に読み取る努力を続けたら、少しずつ氷解していった。

蒼泉は最初の印象よりも、ずっと表情豊かだったのだ。

そう思つて会話をしたら、会話のテンポや考え方こそ違うものの、楽しいことや辛いことなどの感覚が共有できる子であることがわかった。いったん話し始めると、結構おしゃべりできるタイプであることにも驚いたし、能弁なうえに聞き上手な面があることも頼もしかった。普段は標準語でしゃべっているが、ときどき顔を出す京ことばが、なんとも言えず愛くるしかった。

単なる同居人ではなく、友達になれた気がした。

最初は乗つてもらえなかつたアイスブレイクにも、おずおずと応じてくれるようになった。

アイスブレイクのひとつに、ミラーリングつていうのがあつてね——と蒼泉に説明した。

本来のミラーリングは、無意識、もしくは意識的に相手の仕草を真似することによつて相手との心理的距離を詰める行動を指すのだが、ここでいうミラーリングは、リアルタイムで相手と鏡合わせの行動を取つて、どれだけ両者の動きをリンクさせられるかを競うものだ。成功したら一体感が生まれるし、失敗してもそれなりに楽しいし、次はもつとがんばろうという目標ができる。

試しにパントマイムのような動作を蒼泉と一緒に演じてみて、次に中学校で習つたダンスを演じてみた。さらには戦闘の演武もミラーリングでやってみた。だんだん動きを早めてもみた。

蒼泉のミラーリングは完璧だった。天才だと思つた。

また戦闘の修行では、自分の臨機応変——悪く言えば行き当たりばつたりな戦い方を的確にカバーしてくれるので、去年までとは段違いの好成績を出せた。

阿吽の陣になれた気がした。蒼泉を理解できた気がした。

でも、それは間違いだった。

蒼泉のなかに秘められた想いをまったく知らなかったのだから。

今日、蒼泉に泣きながら心情を吐露されて――。

正直、赤面して、訳がわからなくなってしまうた。

だけど――自分の魂と蒼泉の魂が、勢いよく吸着したような感覚に陥った。

こういうのを禅宗の言葉で、なんとか同時って言うんだ。

想いを全力で受け止めたい、彼女とずっと一緒にいたい――そう強く感じた。

指と指、頬と頬をくっつけていたような、甘い情感。

お互いの耳元で交互に、二人だけの内緒話をささやきあっていたい、甘い願望が。

自分のなかに生まれたことを、ぼんやりとだけど自覚した。

――だけど今日は、自分の迂闊が原因で、みずみずに心配をかけ、怪我をさせてしまった。

――みずみずだけでない、八部衆にも円覚さまにもガーデン自体にも損害を与えてしまった。

――だから、責任をとって一人でヒュージをやつつける。それがせめてもの罪滅ぼしだ。

――みずみずの前に立ちほだかった、あの一体のヒュージだけでも。

――わたしの守り本尊は、護法の炎を吐く迦楼羅なんだから。

あ――でも頭がくらくらする。

そっか、思い出した。ガーデンを抜け出して、御山を彷徨っている途中で熱を出して倒れたんだ。

えっ——じゃあ今の全部走馬灯？　ここ三途の川？　いやいや。

まだ死ねない——わたしが破門になったからって、死んだからって、ヒュージがいなくなるわけじゃないんだから。

——死ねない。

「目が覚めたかしら？」

どこからか清らかな声が聞こえたので、頑張つて上体を起こす。

眼を開ける。ピントが甘かった視界が鮮明になる。

誰もいない。

あれっ、と思つて後ろを向いてひゃあ——と驚く。

枕元には、老いた尼僧がいた。

細面の痩せた体格で、紫の法衣に橙色の五条袈裟ごじょうけさをかけ、白い尼頭巾から覗く切れ長の目には、厳しさともいえない慈愛が同時に感じられた。

辺りを見回してみる。

梁はりが見える。屋根板の内側が見える。

梁から柱、柱から土台へと、しっかりした木造建築らしき基礎ができているが、側を覆う壁板は簡素というか、どうもシンプル過ぎるように感じた。

四畳半ぐらいの土間がふたつあり、翼彩はその片方の土間で、莫座もざを敷いて寝かされている。もうひとつの土間は中心が囲炉裏になっている。いずれにしてもこの庵には、土間しかないのだ。

向こうの土間には、ガーデンでも見たことがある、宝珠をかたどった燭台があり、蠟燭が七、八本ぐらい適当に灯っている。囲炉裏の火と併せて、これがこの空間の光源のすべてか。

何かを沸かしているような湯気が見える。

鉄瓶のようなものの蓋がかちやかちやと音を立てている。

湯気の向こうには、平たい石のようなものが地べたに敷き詰められていて、その上に小さな和箆わだんすと位牌らしきものが見える。

屋根同様、簡素な木板で作られた壁があり、そこにはA4サイズほどのポートレートに入った写真が飾られていた。

翼彩は目を凝らす。

写真には、見目麗みめうるわしき花嫁が二人写っている。

片方は和風の花嫁、もう片方は洋風の花嫁。

写真はカラーだけど、顔の部分だけがモノクロでピントがぼけており、まるであとから切って貼り付けたかのようなだった。もつと言えば、和風の花嫁と洋風の花嫁も、どこから切って貼ったような違和感があった。写真の上下左右にはなにか細かい字が書いてあるが、体調以前にそこまで視力はないので読めない。

遠くのほうで、轟轟とした川の流れる音が聞こえる。

この音は、聞いたことがある。

「ここは——？」

「ここは志良庵。拙僧はこの庵主——志妙尼と申します」
そう言つて老僧は、指と指を交差させる金剛合掌をした。

「庵主さま、わたしを——助けてくださいませんか？ 重かつたですよ。ごめんなさい」
志妙尼は、そんなことないわよ、ひよこみたいに軽かつたわよ——と言つて笑つた。

「こんなぼろぼろの庵でよかつたら、熱が下がるまでゆつくりしていくといいわ」

ぼろぼろだなんてそんな——と、翼彩は手を払って左右に振る。そのあと思い出したかのように、わたしは飛鳥井翼彩と申します、鹿野苑高等女学園の生徒です——と言つて金剛合掌を返した。

優しい人に助けてもらえてよかつた——翼彩は合掌をしながら、心から感謝した。倒れている自分を見つけたのが人間だけで儲けものだ。熊やヒュージだったら命はまずなかつただろうから。

庵の中は生姜、丁子、桂皮、鬱金、沈香、没薬など、様々な香の匂いや膠が隅々まで染み込んでおり、庵と
いうよりは漢方薬局か鍼灸医院、はたまたインド料理屋のようだった。よく見ると志妙尼の足許には香炉が置かれていた。

翼彩は座つたまま背伸びをして、肺胞の奥までその複雑なフレーバーを吸い込む。

「いい香りですね。心が休まるような、誰かを慰めるような、それでいて邪気を寄せ付けない厳しさがあるよ
うな——まるで庵主さまそのものみたい」

志妙尼は目を細めた。

翼彩ちゃんもお香が好きなの？ と聞く。

「はい！ お腹が空いたときにいちごのお香を焚いたりします」

真面目に答えたつもりだったが、志妙尼は笑った。

笑つてから、めんごいおぼこだなあ——と言つた。

言葉の意味はよくわからなかつたけど、翼彩は照れくさく感じた。

土間に手をついてみる。莫塵の上に寝かされていたが、それ以外は木の土台に囲まれた、完全な土だ。どちらの部屋にも床はないんですか、と訊いてみる。

「この方が、土の温かみを感じられるでしょう？ 毎日毎晩、この土の上に莫塵を敷いて寝ているのよ」

「えーっ、本当ですか？」

志妙尼は、私にはこの土が温かいの——とつぶやいた。

よくわからないし、土に体温を奪われてしまうような気もするけど、そういうものなのか、と翼彩は志妙尼の答えを飲みこむ。

「あのっ——ここつて一体どの辺ですか？ 御山ですか？」

翼彩はよろよろと立ちあがり、戸板を開けると、辺りは真つ暗闇で、夕方から吹き始めた北風、そして川の音が大きく迫るように聞こえた。

危ないから——と袖を引つ張られて引き戻された翼彩は、バランスを崩して莫塵の上にぺたんとして座り込む。まだ体調は回復していないようだ。

「そう。ここは鹿明寺——いえ、今で言う鹿野苑高女がある御山よ」

御山の敷地内にこんな庵があるなんて知りませんでした、と言葉を発したあと。

「あ——」

翼彩は、口に手を当てる。

知っていた。立ち入ったらいけない庵——。

他宗の寺や庵に立ち入ったらあきまへんでよシエイエイエイ、ってツイストを踊りながら円覚さまが言つてたのは、このことか。

いや——そんな変な言い方はしなかつたと思う。踊つてもいなかつたと思う。まだ熱で意識が混濁しているのか。

それはともかくとして、ここは入ることを禁ぜられた場所だ。

来てはいけないところに来てしまったんだ——。

志妙尼は翼彩の不安そうな顔色を察し、目を細める。

「ここには来てはいけないって教わつたのかしら。大丈夫よ」

鬼も蛇も出たりしないわ——と急須に湯を注ぎ、出るとしたらこのぐらいかしら——と、湯呑みに熱い番茶を淹れて、盆のような丸い板に乗せて翼彩に出す。

翼彩はあちあちと言つて息で冷ましながらお茶を少しづつ飲んだ後、ふう——とため息をつく。食道から胃の腑に流れる温かな潤いに、自分の身体の中がいかにか冷えきつていたかを自覚する。

身体だけではない。座つて熱いお茶を飲むという行為が、どれだけ安心感をくれるのか、一時的にであつても、もう安全な場所にいるんだという感覚をもたらすのかを実感する。

——この人は、寄りすがつてもいい人なんだ。

ごちそうさま美味しかったです、と言つてべこりとお辞儀をしたあと、そうですその鬼と蛇です——と話を始めた。

「わたし、ヒュージを退治しに来たんです。その途中ですつごい具合が悪くなって、熱も出ちゃつて」

倒れてしまったのだ。

今日は色々あったから。

頑張ったのね、と志妙尼が翼彩の髪を撫でる。

くすぐったくて、少し嬉しかった。

「京の外れの御山だから、こんな時間になれば真つ暗だし、歩くだけでも危ないから、今夜はここで寝るといわ」

「そうだ、ずっとここで暮らすといいのよ——と笑いながら言う志妙尼に、そんなわけにいかないですと、翼彩は戸惑い混じりの笑顔で返す。

背を向けて小さな和筆筒の中から何かを探す志妙尼を、翼彩は見つめた。

たおやかで優しく、安心を与えてくれて、こんなおばあちゃんになりたいな——と思った。

「一晩だけお世話になりますと言ったあと、再び部屋を見回して、庵主さまはずうつと前からここに生まれるんですか？」と聞く。

しかし、志妙尼の背中は何にも答えてくれなかった。

翼彩は、再びポートレートの写真を見上げる。

二人の花嫁と顔を切り貼りした、アンバランスな写真。

でも、翼彩にはとても華々しいものを感じられた。

「あ、この右側の花嫁さん、庵主さまですよね？」

翼彩が尋ねると、志妙尼は無言の笑みを浮かべた。

「庵主さまもお友達もお綺麗です。お二人がそれぞれご結婚なさったときのものですか？」

志妙尼の笑みに、寂寞感のような陰りがみえた。

えっあれつ、お友達じゃないのかな——なんか間違つたかな、と口ごもりながら、志妙尼とポートルートを交互に見る。

やはりここからではよく見えない。

立ち上がつて視力の許容範囲まで近づいて、よく文字を読む。鉛筆の字のように見える。

ポートルートが高い位置に架けられているため、下に書かれている文字は小さくてやはり読めなかったが、花嫁たちの横に書かれている少し大きな文字は、鉛筆で太く書かれているためか、黒く光を反射していたのでなんとか読めた。

左側の生気が抜けたような表情の花嫁には『晶良』。

右側の黒目勝ちの瞳で笑っている花嫁には『死げ』。

——と、書いてあつた。

「死——？ 庵主さまは、死げさんが本名なんですか？」

不吉な字面になんとも言えない薄暗いものを感じて、翼彩は志妙尼に尋ねる。

「本名は違う字なんだけどね——それを書いたらいけないの」

えっ——と、翼彩が意味を問う暇も与えず。

「本当の名前を書いたら——居られなくなるからいけないの」

「私は生きるって約束したから——見守らないといけないの」

続けざまに。まるで自分自身に言い聞かせるかのように。

いや、言い聞かせてきたかのように。

志妙尼は悲しそうな、何かを訴えたがっているような表情で翼彩に歩み寄る。

北風か——。壁板ががたがたと音を立てる。

「庵主さま——庵主さま？」

老僧の瞳の焦点は、定まっていなかった。

「庵主さま——どうされたんですか？」

動揺する翼彩の問いかけは、風が打ち鳴らす壁板の音と、川の流れにかき消されたかのように感じた。かき消されていなくとも、夜の山の小さな庵では、何を叫ぼうと喚こうと、気づく者など居はしない。志妙尼が。死げが。一步一步、翼彩に近づいてくる。

強い風が、もはや風の音に聞こえないぐらい断続的に壁板を叩く。

翼彩の肩から背中にかけて、冷たい砂でも流されたかのようなぞつとする感覚を覚える。

「庵主さま——」

さつきまで穏やかだった志妙尼の変貌に対して、距離を置きたいのか理解をしたいのか自分でもわからず、それでも足だけは後ずさる。しかし背中は壁板で、退路はすでない。

志妙尼が翼彩に顔を近づけて、その小さな右手を取って握る。

目を見開いて、大きく息を吸い込む翼彩。

痩せこけた尼は、両手で翼彩の右手を包み、ゆっくり口を開いて——。

だから、すぬもんか——と、震える声でつぶやいた。

その眼は充血していた。皺だらけの頬は、濡れていた。

翼彩の右手を握った老僧の手は、とても熱かった。

「泣いてらっしやる——んですか？」

その時、壁板を叩く音が一層強まり、力強く玄関が開けられた。

びゅうという音を立てて、北風が庵全体に吹き込んでくる。囲炉裏の灰は吹き散らかり、火種が爛と輝く。燭台の蠟燭は吹き消えそうになりながらも、かろうじて光を保った。

玄関には、一条蒼泉が立っていた。

淡い輝きをたたえた髪と、膝までの制服のスカートが、吹き込む強風にたなびいている。風のせいか、髪の毛は唇に啜えられている。

普段は天女のように見えていたのだが、翼彩の眼には、今の蒼泉が怨念を持った「ゆきをんな」のようにも感じられた。

「みずみず！ 迎えに来てくれたの——？」

怪我は？ 怪我は？ と質問を畳み掛ける翼彩に、蒼泉は無表情を返した。

この無表情は——わからない。

頬もしさにも笑顔にも、怒りにも悲しみにも感じられた。

蒼泉は木戸を閉め、唇に啜えた髪を直しながら志妙尼に近づいて。

「お会いしとうございました。あなたが、布宮志げさんですよね」

まずは、その手を離していただけますか——と言った。

志妙尼は気がついたかのように翼彩から手を離し、いかにも私は志妙尼こと——俗名を布宮志げと申します、と金剛合掌をする。

「あなたはどちら様？ 翼彩ちゃんのお友達？」

「拙僧は鹿野苑高女一年でリリイをやっております、一条蒼泉と申します。まずは翼彩を保護していただき、有難う存じます」

本日は、此方こちの翼彩を迎えに来ますとともに、ひとつ教えを乞いに参上しました——と言って、蒼泉は深く頭を下げ、金剛合掌をした。

「翼彩は私の先輩であり、お慕いしている大切な人です」

その右肩には、携行状態の法剣と翼彩の法槍が、白いストールで括られてあった。

蒼泉は、架けられているポートルートに目を遣って。

ああ、心の風土病に相違ないですね——とつぶやいてから志妙尼を見据える。

志妙尼が、怪訝そうな目つきで蒼泉の顔を見て、言葉の真意を探ろうとする。

蒼泉は——それでも無表情だった。

(続)

十一(とおい記憶)PDF版

発行日 2018年3月29日

著者 DOGMASK
<https://www.pixiv.net/member.php?id=873859>

連絡先 <http://dogmask.blog129.fc2.com/>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
